

龍澤山善寶寺五百羅漢像模刻制作から見る造像技法の一考察

門田 真実（東北芸術工科大学大学院）

1. 研究概要

本研究は、龍澤山善寶寺（山形県鶴岡市）五百羅漢像（以下、善寶寺像）の頭部に見られる「錐点」に着目し、江戸時代の造像技法について考察を行う。さらに善寶寺像の内1体を模刻制作し、造像技法の検証・考察を試みる。

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターでは、2015年度から受託事業「龍澤山善寶寺五百羅漢像保存修復業務」として、堂内に安置される、500体を超える仏像群に対して保存修復を行っている。これまでの調査から、善寶寺像挿首底面や像底面、台座から「畑」及び「畑次郎右衛門」の銘文が発見されたことにより、善寶寺像は京都仏師・畑次郎右衛門を中心とした仏師集団によって江戸時代後期に分業で制作された可能性が高いことが判明している¹。

善寶寺像は、その表情や手足の動き、着衣など1体として同じものは見られず、バラエティーに富んでいるが、群像としての統一感を感じさせる。善寶寺像には複数人が分業で携わったと考えられており、仏像制作において、統一した造形を保つためには、工房内や仏師間に何らかの共通した造像技法の存在があると予想された。そして、修復事業における学術調査から、その技法の一端と見られる目印「錐点」が善寶寺像頭部の額・両目間・口や耳周辺に発見された。錐点とは、仏像を制作する際、基準とする位置に錐で穴を開け、彫り進めることで下図が失われても基準点を見失わないようにするための工夫である。善寶寺像のような群像を制作する際は、多くの仏師の手で分業されることから、錐点によって顔の造作比率をあらかじめ定めることで、効率よく、統一した造形を保ちながら制作を進めることができたと考える。

山崎隆之氏²の先行研究によると、仏師の間には造像比例法という仏像の造形法則が存在し、仏像の「髪縁～口」までの距離を基準に各部材の割合比率を定め、その目印として錐点という技法が用いられていたと類推している。そこで、善寶寺像頭部の錐点が造像比例法に関連していると考え、錐点同士の間隔距離が、善寶寺像制作時の寸法を定める際の基準となっているのではないかと推測した。

本研究では、善寶寺像頭部正面の錐点同士の距離と像の主要箇所を、X線写真を用いて計測を行い、錐点「額～口」と像主要箇所の計測値を比較し、善寶寺像造像における規則性の有無と、錐点と造像比例法との関係性の考察を行う。

また、制作者の畑次郎右衛門一派の造像技法の傾向と、造像比例法と錐点が実際の制作にどのような役割を担うか、善寶寺像【22-30】³の模刻制作から検証・考察を試みる。

1 柿田喜則、笹岡直美、井戸博章『善寶寺五百羅漢像保存修復業務 2018 年度事業報告』（2018）東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター紀要、pp.41-54

2 山崎隆之『仏像の造像比例法—高村光雲「仏師木寄法」について』（1995）愛知県立芸術大学紀要 pp.9-12

3 善寶寺像1体ずつに付けられている附番は、「龍澤山善寶寺五百羅漢堂保存修復業務」において、像を識別するためのものである。

2. 面部錐点と主要箇所計測

本研究では、2021 年度修復予定と 2017 年度から 2021 年度までに修復が完了している像の中から、「錐点が見られる且つ、正面を向いて坐し、動きが複雑でない」条件に当てはまる 30 体を計測した。加えて、山形県内の善寶寺像と同作者による制作と考えられる、高島町玉龍院五百羅漢像・十六羅漢像と、三川町在所青陽院十六羅漢像の計測を行った。

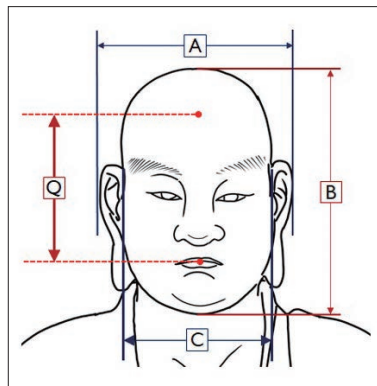
計測箇所は以下の通りである⁴。

頭部正面計測箇所名称 [図 1]

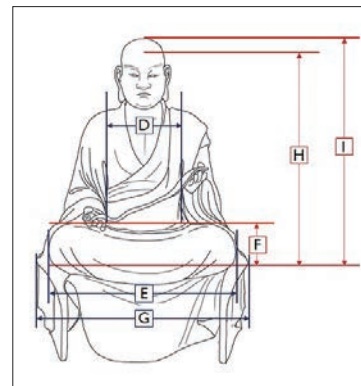
Q：錐点「額～口」 A：耳張 B：面長 C：面幅

体部計測箇所名称 [図 2]

D：脇幅 E：膝幅 F：膝高 G：座面幅 H：額点～座面 I：座高



〔図 1〕 頭部計測箇所



〔図 2〕 体部計測箇所

3. 善寶寺像模刻制作

模刻制作対象に【22-30】を選定した理由は以下の3点である。

- ①坐像の基本姿勢となる造形「正面を向いて坐し、動きが複雑でない像」に当てはまる。
- ②像頭部に見られる錐点が、他の善寶寺像と比較し、比較的多く所定の位置に確認することができる。（頭部正面の額・両目の間・唇の3点、頭部側面の耳前に縦に3点、耳上後ろ寄りに1点）
- ③框座天板に畑次郎右衛門の銘文がある。

4. 模刻対象像【22-30】概要

【法量】（cm）

総高 79.2 像高 59.2 最大幅 36.8 最大奥 24.3

4 計測箇所は太田古朴『造像法』『仏像彫刻技法』（1980）綜芸舎 pp.5-36 を参考とした。

【品質構造】

ヒノキ材、寄木造。彩色。頭部挿首。玉眼を嵌入する。

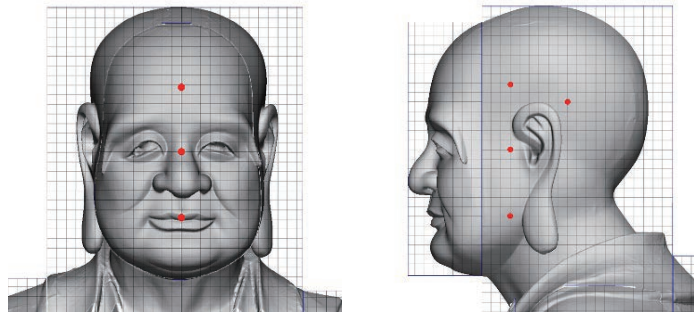
頭部はこめかみ付近で材を前後に矧ぎ寄せる。

体幹部は前後から2材を寄せ、そこに左右から両肩各1材ずつ矧ぎ付ける。膝前1材。

裳先は板状の1材と、小材を裏面の左右それぞれ1材ずつ矧ぎつける。両手首別材。額、両目の間、上唇や耳周辺に制作の際、利用されたと思われる小穴（錐点）を確認する。彩色は、木地上に白色下地を置いて描かれる〔図3、4〕。



〔図3〕 善實寺像【22-30】



〔図4〕 【22-30】 頭部錐点位置

5. 模刻制作工程

① 木取り・図面転写

3D から図面を制作し、各部材の寸法を決め、製材した木材に図面を転写した⁵。

② 錐点

錐点の担う役割、配置意図について考察を行うため、計測結果を参考に面部の額・両目間・口の3点に錐点を打った。

側頭部の耳前の3点の錐点は、面部正面錐点3点と同高に打たれているようにも見られるが、X線写真からは正確な位置と高さを判別することが難しい。そのため、挿首底面からの高さが判明している面部正面3点とそれぞれ同高に打たれていると仮定し、側頭部の錐点位置を決定した。耳後ろ上部にある錐点については、頭部角材の側面正中線と耳殻上辺に接するように引いた直線が交差する点に仮に錐点を打ち、それぞれの錐点について考察を試みた。

③ 粗彫り

余分な材を落とし、全体的に具体的な形を削り出した。

④ 中彫り

鑿や彫刻刀で衣文や面部の細部の彫成を行った。

⑤ 仕上げ

全体の形の印象が整った後、小道具や彫刻刀で細部の仕上げを行った。

5 奈良県立大学地域創造研究センター特任教授山田修先生に3D計測と図面の制作にご協力を頂いた。

6. 計測結果

頭部錐点「額～口」を基準とし、各計測結果との比較を行った〈表 1、2〉。計測結果から、善寶寺像各部は錐点「額～口」に対し、以下の比率で造像されている傾向が見られた。

〈表 1〉 頭部計測箇所比率 [図 5]

計測箇所	A 耳張	B 面長	C 面幅
比率	1 つ半	2 つ	1 つ

〈表 2〉 体部計測箇所比率 [図 6]

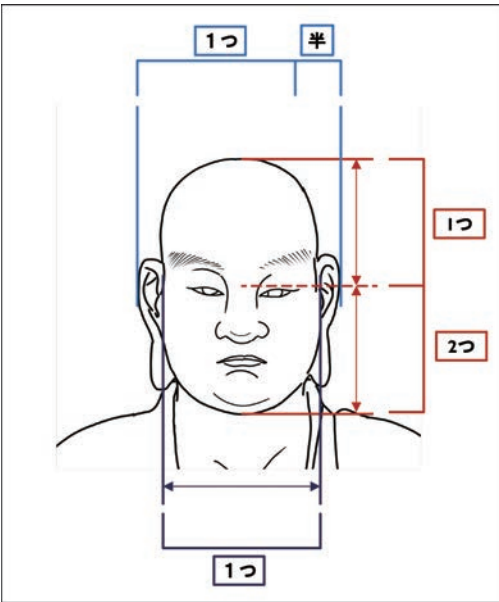
計測箇所	D 脇幅	E 膝張	F 膝高	G 座面幅	H 髪際高	I 座高
比率	2 つ	5 つ	1 つ	5 つ半	5 つ半	6 つ

今回計測結果から得られた善寶寺像の A、D、E、F の比率は、太田古朴著『仏像彫刻技法』に明記された、江戸仏師法と運慶法則の比率に類似していることから、善寶寺像は錐点「額～口」と像各部の計測値との間に一定の比例関係があることが判明した。

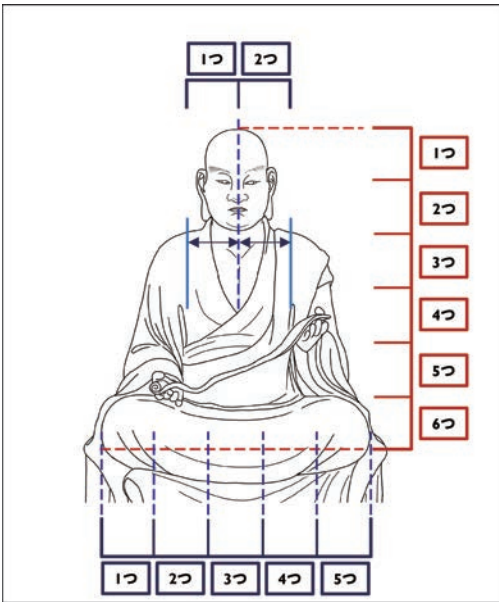
このことから、善寶寺像頭部正面の錐点は造像比例法に基づいた配置である可能性が高いと考えられる。また、類似例である青陽院像と玉龍院像の計測結果から、善寶寺像と同様の比率で造像され、像頭部正面錐点配置は造像比例法に基づいていることが推察された。このことから、基本的に同じ様式の像は大きさの変化に関わらず法量の比率は一定であることがわかる。

山崎隆之氏の論文では、仏像の寸法決定をする際、「髪際～口」を基準に各部材の比率を決定すると解説している。今回の計測から、善寶寺面部の錐点「額～口」までの距離と各部計測値との間に比例関係が見られたことから、「額の錐点＝髪際」であると考えられる。

また、計測像の半数以上は錐点「額～口」の距離が約 6.5cm～7.0cm の範囲であることから、当時は曲尺での計測だと考えられ、「2 寸 2 分（約 6.6cm）」または、「2 寸 3 分（約 6.9cm）」を 1 単位とし、それを基準に各部の比率を決定していると推察された [図 5、6]。



[図 5] 善寶寺像頭部比率



[図 6] 善寶寺像比率

7. 錐点が担う役割について

面部錐点については、錐点を額・両目間・口の3点を決まった間隔で打ち、面部パーツの配置位置を決めることで、複数人での分業制を可能にし、像個々の表情や容貌が異なっているにもかかわらず、面部の像容を統一感を保ちながら彫ることができ、鑑賞者が受ける群像全体の印象が崩れてしまうことを防ぐ役割を担っていたと推測される。また、錐点が彫成の際のガイドとなることで、効率的に作業を行えると推察できた。

側頭部錐点は、面部錐点と同高に打ったものと仮定し彫成を行い検証と考察を試みた。模刻制作から、側頭部錐点の耳前の3点の錐点は側面からも目や口のある程度の位置を確認できるように、面部錐点とそれぞれ同高に打たれていた可能性が考えられた。また、耳前後に錐点があることにより、彫成時の耳の位置が前後にずれることを防ぐ役割を担っていると推察できた。錐点配置を決め、パーツの配置の間隔を統一・固定するなど規則性を持たせることは、西洋彫刻での星取り法のようなものがなく、図面のみで木材に直接鑿を入れて彫り進める江戸時代以前の造像において、また複数の手が加わる群像制作において最も重要視されたことであると考えられる。

8. 総括

善寶寺像のような大量の仏像を造像するためには制作者に共通した造像比例法などの設計図が必要であると考えられる。善寶寺像の計測結果から、錐点間距離と像主要箇所間に造像比例的関係性が見られ、善寶寺像制作時に造像比例法を利用し制作していたことが推察できた。

一方で、善寶寺像や類似像の計測値や各部比率については規則性が確認できたが、それが畑一派における造像技法の傾向であるかについては本研究で断定に至らなかった。本研究では、善寶寺と山形県内の寺院の調査に留まったが、今後は畑次郎右衛門周辺及び、北前船との関りが深い地域の五百羅漢像・十六羅漢像の調査を行うことで、江戸時代末期の京都仏師の造像技法の詳細についての解明につなげられると考える。

9. 模刻制作所感

今回、善寶寺像【22-30】本体を隣に置き、間近に見ながら模刻制作を行うことができた。本像は寄木造で制作されているため、各部材の造形の統一感を出すことに難しさを感じた。

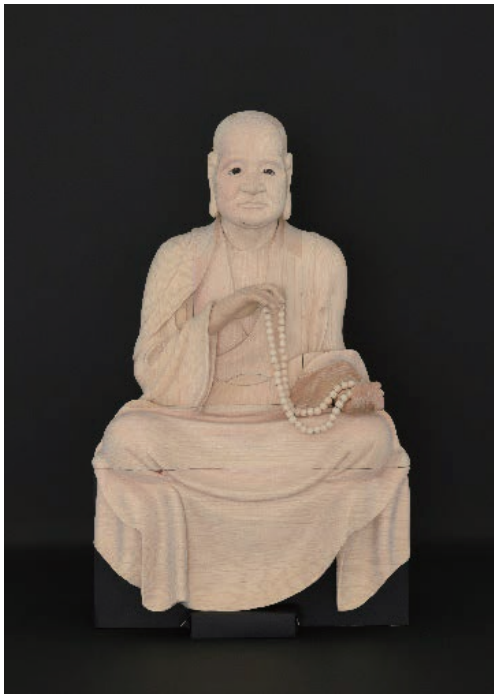
また、本像は板状の部材を箱型に組む木寄せ構造をしており、中心に空間ができるようになっている。そのため、体部の内削りの手間がだいぶ省けた。また挿首を差し込む穴を削るのも容易であった。

内削りに関して、本像は挿首両脇の襟材や薄い体部材にまで内削りを施している。また、両袖材は底面から1cmほどの厚みを残し、底面に平行に鋸であたりをつけることで、無駄なく内削り、軽量化につなげている。善寶寺像は、京都で彫刻され北前船で山形まで運ばれ、五百羅漢堂内に安置されたと考えられる。

また、五百羅漢堂内には、天井近くの高所にまで像が安置されている。そのため、軽量化は必須であったと考えられる。善寶寺像は箱組の構造であるため、体部前後の材は極端に薄く材ごとの接着面も少ない。そのため大変脆弱な構造であることを実感した。このため腹部や腰部に思い切った

彫り込みができなかった。彫り不足から自然にぼてっとした胴体となり、外面にも胴体の角ばった箱型が感じられた。

彫り進めるうち、体幹部前面材と左袖材の矧目に隙間ができ、内側から小材を当て彫成を行った。これは、未解体である【22-30】においては、目視調査やX線写真からだけでは確認できなかった構造であった。このような構造は、2020年度に修復が完了している像【11-28】にも確認できていた。模刻制作により、未解体像である【22-30】も【11-28】と同様の構造を持つことを実証できた。また、この隙間を埋めるための小材を入れることにより、材同士の接着面も担っている。これは、3D計測によって精緻な材の寸法を割り出し、実際に模刻したことで判明したと言える〔図7、8〕。



〔図7〕 善實寺像【22-30】模刻像



〔図8〕 模刻像構造

謝辞

本研究にご協力賜りました、龍澤山善實寺関係者様各位、青陽院住職鈴木孝純様、玉龍院住職金子堯信様、奈良県立大学地域創造研究センター特任教授山田修先生、各方面でご指導いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

主要参考文献

太田古朴「造像法」『仏像彫刻技法』（1980）綜芸舎

山崎隆之「仏像の造像比例法―錐点について」（1986）愛知県立芸術大学

山崎隆之「仏像の造像比例法―高村光雲「仏師木寄法」について」（1995）愛知県立芸術大学紀要

佐藤真依「善實寺五百羅漢像の頭部錐点についての考察」（2020）東北芸術工科大学

岡田靖・長谷洋一「江戸時代から明治期における京仏師と地方仏師」『国立歴史民俗博物館研究報告』第230集（2021）国立歴史博物館